

## 平家物語の小野小町

白石 一美

### はじめに

平家物語、その異本の一つ、長門本に小野小町のことが次のように記されている。

あはれ歩行〈カチ〉にて下る事なりせば、小野小町が歌のふし、あづまや、かちを、駒いな、けば、たにくら谷とかやを見てましものと思はれけり、(足摺明神事 131頁)

この条をどう読むかを問題としたい。文中、ことに解り難いのは「歌のふし」である。小町の家集に「あづまや」云々なる和歌は存在せず、難問である。作者が小町とその歌をどう扱っているか、平家諸異本間の異同編纂状況を調査して、読みの私案を提示してみたい。

### 一

小野小町は、六歌仙・三十六歌仙の一人であり、百人一首にも見える平安期の歌人である。小町のことは平家物語諸本にも見える。物語展開上、その導入位置は語り系平家で申せば巻第九末尾相当の位置である。この部分、諸本大同小異の記事であり、小町個人への興味は見えるが、小町の歌は無い。したがって当面の問題解決の資料たりえない。それで終わりであるが、参考までに平家物語一般における小町への興味のあり方を巻第九末より紹介しておく。

平通盛に先立たれた小宰相は屋島の海に入水した。続いて二人のなれそめが語られ、その中に小野小町の挿話がある。心強くも男の誘いに容易になびかぬ女の例として小町があげられ、「小宰相も小町のようになってはいけない」と上西門院みずから手を遊ばして通盛への返歌をしたため、二人の仲を取持ちになったという。語り系の覚一本平家より次に引く。

中比小野小町とて、みめかたち世にすぐれ、なさけのみちありがたかりしかば、みる人きくもの肝たましるをいたましめずといふ事なし。されども心づよき名をやとりたりけん、はてには人の思ひのつもりとて、風をふせくたよりもなく、雨をもらさぬわざもなし。やどにくもらぬ月ほしを、涙にうかべ、野べのわかな、沢のねぜりをつみてこそ、つゆの命をばすぐしけれ。女院、「是はいかにも返しあるべきぞ」とて、かたじけなくも御すゞりめしよせて、身づから御返事あそばされけり。(日本古典文学大系本・下・235頁)

この条は、所謂増補系平家の延慶本・長門本・源平盛衰記をも含めて、平家諸本ほぼ一致した本文である。小町の歌も無く、男女の道に好ましくない女としての伝説・説話化せられた老残落魄の女人像がここにある。すなわち早期に成立した平家物語の中に言わば民俗学に一歩近づいた小町像が既に見られるのであるが、これは採らない。

小町の歌の片鱗が巻第九末に存在すると仮定すれば、諸本ほぼ共通の安定した本文ゆえ、著作権は早期に成立した平家作者にあり、彼の小町観ゆえ、長門本筆者の小町観ではない。ちなみに、存在するとは引用本文中の語句より特定の歌もしくは文献資料を絞り込む作業に関わ

るの謂である。

## 二

一般に平家物語の本文をその性質に即して分類すれば、三つに分けられると思う。

他筆・改造・自筆 この三つである。

他筆とは、前の巻第九「小宰相身投」に見たような本文、即ち平家諸異本間の詞章に大きい変化が無い本文、平家物語発展史上、古くより存在していたであろう本文を言う。古い平家本文を承けて新しい本文を制作中の異本の筆者には先人の筆になる本文であり、異本筆者の寄与は細部の小字句・短詞章の変更など、僅々の域にとどまるかと思う。(先行本文)

自筆とは、平家の特定異本中における創作本文を言う。異本制作者独自の筆になるものであり、他の平家物語の諸異本には全く存在しない詞章である。(独自異文)

改造とは、古い平家の詞章を継承するが、微細字句などの加除異同を除き、叙述本文に筆者の創作意志・思想に基づく詞章の書き改めをうけた本文を言う。(推敲編集本文)

甲異本群と乙異本群との関係、三者三つ巴の関係など、更なる細分類が可能であるが、分類自体が当面の課題ではないので、取りあえず以上の三分類を提示しておく。

さて「小野小町が歌のふし」云々は、以上のうち、自筆に入る。「あづまや」云々を「中世の自称小野小町」即ち旅する芸能人の類かと思って、以前調査したことがあるが、場にそぐう結論が得られず、行き詰まった。中世の次の時代、近世文人の随筆類や地誌・郷土誌廻りを中心に調査したが、得られる小町像は、薬師信仰的なもの、中世乃至近世の民俗学的和泉式部に通う女流宗教家像に近いものである。

東北は秋田など俗に秋田小町と称せられ、秋田音頭の小町の在所、小町伝承は根強いが、これら民俗方面のことがらは、平家の小宰相における小町の虚像同様、当面の問題、藤原成経が硫黄島へ下る、豊後路下向の旅の場面、小町が歌のふしに適合せず、除外する。

予め結論の一端を示せば、「……歌のふし、／あづまや……」を続けて読まず、ふし迄が小町の原作方面／あづまや云々を筆者の地の文とそれぞれに分けて読むこととなる。続ける限り民俗学的になって雲をつかむようなことになる。(前者／後者の連絡は後述)

## 三

方法論を変更して長門本の筆者自身が小町をどう取り扱ったか。以下、述べてみたい。

いわゆる鹿ヶ谷事件に連座して俊寛・康頼・成経の三人は薩摩瀧に流された。流された康頼は硫黄島で夢を見た。その夢の部分和平家諸異本の中より抄出・比較する。

以下、いわゆる語り系平家物語より1覚一本本文を、増補系平家より2延慶本・3源平盛衰記・4長門本の本文をそれぞれ順に引用する。引用の底本は1日本古典文学大系本(上冊)・2白帝社版・3国書刊行会刊本・4有朋堂文庫(上冊)であるが、難漢字や読解の便宜上、漢字や仮名を適宜改めるなどして引用する。(要点 1 2 3は短詞章・4は改造にして典拠あり)

1 暁方に、康頼入道ちとまどろみたる夢に、沖より白い帆掛けたる小船を一艘こぎよせて、舟のうちより紅の袴きたる女房達二三十人あがり、鼓をうち、声を調くトトノへて、

よろづの仏の願よりも 千手の誓ぞたのもしき  
枯たる草木も忽に 花さき実なるとこそ聞け

と、三べん歌ひすまして、かき消つやうにぞ失せにける。夢さめて後、奇異の思をなし、康頼入道申けるは、是は龍神の化現とおぼえたり。(覚一本巻第二・卒塔婆流 202頁)

2 油黄島に被流たる判官入道の或夜の夢に、海上を遙に詠めやれは白き帆懸たる船の興(オキ)の方より漕来るとみる程に、次第に近く漕寄るをみれば、我子の左衛門尉基康其船に乗たりけり、其白帆に文字あり、妙法蓮華経信解品とそ書たりける、猶次第に近くよるをよく〜見れば、船にはあらずして白馬にそ基康は乗たりけると見て打驚、なにと有る妄想やらむと恠くて、汗をしのこひて人にも語らさりけり、(基康清水寺籠事 160頁)

3 硫黄が島にて判官入道の夢に、海上遙に詠れば、白き帆懸たる船一艘走来り、近付を見れば嫡子康基此舟にあり、船の帆には妙法蓮華経信解品と銘を書り。急舟を付て、左衛門尉が下来れかし、余に都も恋きに物語せんと思ひ、能々見れば舟にはあらで、白馬に乗たりと見て打驚ぬ。何なる妄想やらんと汗押拭て人にも不語、(康基読信解品事 250頁)

4 康頼島に着きて、廿日と申けるに、不思議の夢をぞ見たりける、夢の心地に前の濱に出で遊びけるに、海上を見渡しければ、こがねにて作りたる大船一艘出できたる、艫舳(ともへ)にはしやうしん(生身)の龍をすへたり、やかたには幔(まん)の幕を引きたり、風のさつと吹上げたるたえ間より見入たれば、十七八ばかりの女房たち、琴をだんじ、びはを引き、今様をうたひ、朗詠し管弦しすましたり、都をはなれて後、いまだ是ほど心を養ひたる事こそなけれと思ふ所に、よはひたけたる老僧五六人なみみさせ給ひて、こんでい(金泥)の法華経机に置きまいらせて、同音に読じゆあり、しんかんにめいじて、随喜なのめならず、船の帆には、一乗妙法蓮華経の文字様々にあらはれさせ給ひたるをかけて、順風に任せ、前の浦を走通ると見たり、あなたつとや、是は此極楽浄土のくぜい(弘誓)の船とかやは、是やらんと思ふ所に、我子の康基が、白き馬に乗て、此島にあがると見たりけり、康頼入道夢さめて、あな不思議や、夢と知りせば今暫くもまどろみて見てまし、はやくも覚めぬる事のむねんさよと恨む、(巻第四・硫黄島眺望事 136頁~137頁)

以上四本の比較、要点のみ一つ指摘すれば4長門本の本文は、他に比べて詞章が長大化し、かつ小野小町の歌「1思ひつ、2ぬればや人の3見えつらん4夢と知りせば5さめざらましを」(小町家集・古今集)を踏まえ、これを敷衍していると判断されることである。

創作技法より見れば、歌の第3句までを白馬上陸までに対応させつつ散文表現して、第4句を地の文に融合一体化(小町の筆兼長門本筆者の筆)、第5句を再び散文化した筆である。

文学鑑賞の立場からは、鑑賞者が第4句相当の地の文の辺りまで読み来たって、はじめて小野小町の歌であると打驚い(目が覚め)て康頼父子の心情を小町の和歌世界に重ねてゆく。

これも一つの鑑賞方法であり、創作技法である。

ここでは「思ひつ、」の歌の「ふし」を、むねんさよと「恨む」と締め括るかと思う。

以上、小町の歌の一部分が長門本の地の文に融合一体化している事例を指摘した。和歌に直接の関連はないが、類似の参考文献に真野国男/荒居茂夫共著『真空管製造技術』(昭和23年5月・修教社)がある。「ガラスと封着線との密着」の項に「ガラスが良く溶けて完全に封着線をぬらし而も伸縮が常に両者に於て一致すれば」(165頁)云々とあり、印象深い。

## 四

さて、以上の判断が妥当かどうか、以下、参考事例を掲げておきたい。江戸時代の俳論書である三冊子に次のような説があり、俳句の典拠としての面影の付け合いを論じている。

何の木の花とも見へず匂ひかな

此句は本歌也。西行「何事のおはしますとは知らねどもかたじけなさの涙こぼるゝ」と有るを倂〈面影〉にして（日本古典文学大系『連歌論集 俳論集』401頁）

要するに「何の木」云々の句は本歌を有する句であり、典拠たる西行の歌を面影にして作った句であると説く。「花」といえば桜が相場、「何事の」とは伊勢神宮のそれが国文系の教養的常識である。共通する字は「何」一字。典拠たる面影は、俳句の上2句が歌の上3句に微妙に対応していると判断される。本歌を露わに表現せず、表現は奥深い。

以上、俳句における原拠としての面影論の例、小町と平家の関係は三冊子ほど極端ではないが、面影と融合と、類似の事例としてここに挙げておきたい。

今一つ、室町末期、伊東義祐の飢肥紀行を次に引く。宮崎市大淀川下流北岸の条であるが、歌の下2句以下「と云ひし事」により自他の区別が明らかであり用法として無難である。

（例えば「何事の」とか「命なりけり」から作者がそれと分かる場合もあるのだが、「其の里人に言問へば」からの伊勢物語の面影は無理であろうか。典拠追求上、気になる点である。）

ある時、飢肥〈ヲビ〉の院に陣所の番とて、…、あはきが原の波間より…、住吉の里も…、人王の始、宮崎の京、神武天皇の御前近き所にて、辱けなさに泪落けりと云ひし事まで思ひ合せられて通りけるに、其の里人にこととへば、平家の一門景清の御墓も有りと聞くまゝに、六字〈ナムアマミダ仏〉一遍手向して、行けば程なく大戸〈オド〉の渡に至りぬ。

（日向郷土会編輯『日向郷土読本』昭和十四年九月・宮崎・文華堂発行・137頁）

## 五

旅人が「あはれ歩行にて下る事なりせば、小野小町が歌のふし、あづまや、かちを、駒いな、けば、たにくら谷とかやを見てましものと思」う背景は豊後水道に臨むアマベ地方の浦々である。豊後海部を詠んだ歌は小町集に無く、「あづまや」云々なる歌も無い。それ故「歌のふし」は下にかかる叙述とは考え難く、本文読解上、「ふし」で一旦切って、「あづまや」以降から独立させる（前者は小町、後者は長門本筆者に属す）。連俳の技法に、打てば響く響き付け（意味表出）・匂い付け（情趣気分）・面影付け（奥深い典拠）等、種々あるが、小町と加筆者と享受者と、複数の人間による付け合い関係に準ずるものと今は見ておきたい。

「ふし」と言われても単数か複数か作者の考えは判然しない。（例えば長門本に「花の色は移りにけりな……長雨〈眺め〉せしまに」等の例が他にあれば眺も併慮）我々は小町の全ての歌をこの箇所アマベに一挙に注入することは不可能であり、限定せざるを得ない。

作者が「思ひつゝ、」云々の歌のふしを「恨む」と要約したことを手がかりに、ウラム→ウラム（浦・見）に限定して小町の家集を検索し、該当する歌を次に拾い上げてみたい。

A あまの住・里のしるへも〈も異に〉・あらなくに・恨みむとのみ・人のいふ覧（古今）

B みるめなき・我身をうらと・知らねはや・かれなて海人の・足たゆくくる（古今）

- C 海人のすむ・浦こく舟の・かち〈カチ・カチ〉をなみ・世をうみ渡る・我そ悲き（後撰）  
 D みるめあらは・恨みむやはと・海人間は〈トハバ〉・浮ひて待ん・うたかたのみも  
 E（長歌）久かたの…我身こそ・心にしみて・袖の浦の…島渡り・浦こく舟の・ぬれ渡…  
 F すまの浦の・浦漕舟の・楫よりも〈よりも異をたえ〉・よるへなき身そ・悲しかりける  
 G 春の日の・浦々ことを・出てみよ・なにわさしてか・海人は過すと  
 （検索は群書類従本に拠り、難漢字の類を海人などに適宜改めた。異は異本）

約120首中、浦・見をリストアップすれば以上である。F上3句は下に懸かる単なる飾り枕ゆえ絶対不可ではないが、須磨とか難波（何業）など特定地名の見える歌や人間のしがらみの露わなる歌を除き除きして、強いて一首残すとすれば、鑑賞者にもよるがCであろうか、恨（浦・見）に加えて「歩行〈カチ・カチ〉楫（舟のオール、舵ではない）」のオマケ付きである。Cは横田幸哉氏によれば、「父の配流中〈遣唐使を辞退して隠岐へ流罪〉、失意のどん底にあった彼女の述懐」の歌（7首例示あり）の一つであり、「恨みと悲しみの歌である」という。（横田幸哉『小野小町伝記研究』279頁～280頁 昭和49年9月・風間書房発行）。薩南流人藤原成経の豊後アマベに我身のウラを嘆く図である。

## 六

「歌のふし」の中に作者は何かを想う。読者もまた作者同様、それを想えとは無理な注文である。主観的にして言葉足らずの表現であるが、前述の如く作者の小町イメージからは、恨み（浦・見）、の意を含むように察せられる。

「をちの瀧そのしら瀧のあの浦は、たゝなるらんとぞ思はれける、あはれ歩行にて下る事なりせば、小野小町が歌のふし、あづまや、かちを、駒いなゝけば、たにくら谷とかやを見てましものをと……」、別に「みやざき学」報告書（2005・3宮崎大学）に述べたが、文中、「たにくら谷」は「たに、くら谷（豊後国海部郡落ノ浦蔵谷）」と切るべきであり、純然たる散文としては「たに」は不必要である。敢えての重複は韻律調整ゆえと思われる。逆に韻律を利用して「カチニテ……（C楫）／……、カチヲ」と繋ぐ。この辺り、蔵谷以降は散文に近く文意も通るが、「あづまや」云々は切れ切れ表現であり、韻文の趣きを残す。切れ切れ表現の原因は、韻律、つまるところは詩と歌なるが故である。換言すれば豊後下りの名所名所の余韻鑑賞を作者が受け手に要求しているとも言い得る。作者は当地域の名所を縁語掛詞を駆使した韻律的方法によって伏在させている。「をちの瀧そのしら瀧のあの浦」、瀧など、重複部分を削除すれば、かまど崎方面の落ノ浦が現れ、をちこち（遠近）を重視すれば遠の滝、JR浅海井駅近辺の暁嵐の滝などが彷彿される。韻文的表現の一技法ではあるが、受け手には難儀の一面もある。しかし、そこに受け手の余韻鑑賞が介在し、漂泊の船路の哀感が生まれるかと思う。

「あづまや」は名詞（東屋、詠嘆の間投助詞やを重ねるか…… 都への心残りもか）であろう。船より望むアマの浦・苫屋、同時にまた船内の屋形、おちこちの居住空間の二重表現かとも思われる。「かち」は同じく海陸ダブルイメージ、歩行と船を漕ぐ楫〈カチ・かじ・オール〉の掛詞、「を」は間投助詞と思われ、詠嘆の時間的継続を示すものと思われる。

流人藤原成経の硫黄島下向にことよせた、豊後沿岸地方を叙する筆者の筆であるが、我が身のウラ、旅の哀傷を道行文中にたたえ、切れ切れの表現は、説明的散文のなしえない韻文領域のものであることを示しているかと思う。以上が最初に提示した問題の私の解である。

## 七

以上、「平家物語の小野小町」なる題で論じたが、以下は「平家物語の何々歌人」・「平家物語の琵琶行」とも言うべく、やや広い視界より硫黄関係の叙述が生まれた事情を見ておきたい。

康頼と成経は、硫黄島の中、然るべき場所を見立てて熊野三山（本宮・新宮・那智）になぞらえて熊野の社をまつり、都帰り・肉親再会を祈る。その実践として千本の卒塔婆に歌「薩摩潟おきの小島に我ありと親には告げよ八重の潮風」等を刻んで海に流したという。

卒塔婆は流れ流れて巖島に漂着、流人が島に生存とのしらせが平清盛の耳に達するに至る。これは流人赦免・都帰りの伏線であり、康頼の歌の才能・歌の徳でもある。引き続いて次のような歌徳の先例が一部の語り系平家物語に語られている。

……入道相国〈平清盛〉にみせ奉り給ふ。柿本人丸は嶋がくれゆく船を思ひ、山辺の赤人はあしべのたづをながめさせ給ふ。住吉の明神はかたそぎの思をなし、三輪の明神は杉たてる門をさす。（覚一本巻第二・卒塔婆流 204頁）

同じ文は長門本にあり延慶本に無い（源平盛衰記は全文が異趣異文、柿本云々以下無し）。第三節に引用した諸本文1・2・3・4を比較すれば明らかであるが、各引用の末尾、延慶本と盛衰記は康頼の夢覚醒を「驚」と古い表現を用いるが、長門本は近代語風の「夢さめて」を用いており、このことから語り系平家のうち、ある特定の一異本に関係があり、次に引く長門本の柿本云々の歌徳譚はかかる一異本からの導入と思われる。

……入道は音もし給はず、柿のもとの人麿は、鳥がくれ行船をおしみ、山辺の赤人は、あしべのたづをながむ、住吉の大明神は、かたそぎの思ひをなし、三輪の明神は杉たてる門をさす、（長門本巻第四・康頼二首歌事 143頁）

佐々木八郎氏によれば、歌徳をうたう短詞章は、平家物語中に遊離し、「後の増補挿入に成つたもの」と推断され、これを除去すれば次の「蘇武」記事との文意が自然に連絡し、その挿入は歌道尊重の時代思潮の結果である由（平家物語の研究・第一編第二章第三節四・392頁・昭和42年10月増補版・早大出版部）。平家全篇一挙読破か、句毎（一曲一曲ごと）に享受かの問題でもある。歌徳説話による「卒塔婆流」一曲の締め括りは享受上の一方法である。

思うに類例はあり、平家諸本は、帰京後、康頼による宝物集の執筆をごく短い筆に記すが（例えば覚一本「少将都帰」最末尾・「有王」の直前）、物語の主筋の展開上、有無を問わない記事ではある。しかし、逆に歌徳譚あるを機縁に平家物語の文学資産が増すことにもなる。

前に小野小町の歌が散文化された例を長門本にみたが、類例をさらにあげよう。柿本人丸以下、歌徳の歌はどう応用されているか。まず日本古典文学大系本の頭注（204頁）によって人丸以下の本歌を掲げておく。

J 人丸・ほのほのと明石の浦の朝霧に鳥がくれ行く舟をしぞ思ふ（古今集）

K 赤人・和歌の浦に潮満ち来れば潟を無み葦辺をさしてたづ鳴き渡る（万葉集）

L 住吉・夜や寒き衣や薄き片そぎの行きあひの間より霜やおくらむ（新古今集）

M 三輪・我が庵は三輪の山もと恋しくは訪らひ来ませ杉立てる門（古今集）

前に長門本の作者は小町の歌を硫黄島の夢に拡散・散文化したが、J人丸の歌は情景詩風であって工夫すれば、豊後の海部に採用可能かとも思うが、直接にはこれを採用せず、やはり小町の影響であろうか、豊後には「小野小町が歌のふし」等とポンと置いている。

次にK赤人・L住吉明神は、長門本の硫黄島関係独自異文のうち、最大加筆部分たる巻第五の大隅正八幡宮記事中、伯耆局説話の最終尾、門出の脇に利用されるかと思われる。

長門本の大隅のメイン記事の一つは伯耆局説話である。この説話の典拠は中国の詩人白居易（白楽天）の琵琶行であると思う。歌は、この中心的典拠に押されて伯耆局説話の最終尾に付随的に位置している。終末部のみ次に引くが、ここは少将藤原成経と京都出身の伯耆局なる女との鹿児島における再会と別離の場面であり、局は少将の訪問・再会・帰洛を三輪ならぬ大隅正宮に祈っていたと言い、少将は恋ならぬ帰路祈願成就の正宮御礼参りとの物語設定である。

すでに少将（帰洛のため佐賀市嘉瀬経由で隼人町を）暁立給はんとての夜は、伯耆殿少将殿に見参し給ひて、ありし世の歎き今に至る迄の思ひ、こまへ申つらねて、涙を流す、少将立給へば伯耆殿涙の中に〈女の歌 帰洛・朝廷再出仕おめでとうございます〉

限りあればさは〈田舎・辺地〉におりぬるあしたづの もとの雲井に帰る嬉しさ  
少将／君ばかりおぼゆる人かあらばこそ 思ひもいでめ山のはの月〈君のこと忘れないよ〉  
とて、をしき名残をふり捨て立給ふ、袖に霜をおきすごくも宮内〈隼人町の地名〉を立給ふ（長門本巻第五・伯耆局事 168頁 要するに成経は女を袖にしたと言う）

女の歌の「あしたづ」は朝がたの出立と芦辺の鶴とをかけた詞である。類歌を次に挙げる。

あしたづの沢辺に年は経ぬれども 心は雲の上にのみこそ（後撰和歌集754）

あしたづの雲井にかゝる心あらば 世を経て沢に住まずぞあらまし（同755）

「限りあれば」は男女それぞれに解せられ、夫々の事情・契機の時間的ことがらを表現している。赤人その他、類型表現をもとに筆者が工夫した歌かと思われる。

住吉明神「片そぎ」からは神社、社の縁で大隅正八幡、「衣」の縁語で袖が連想され、「袖に霜」としたか。時節も十月入りか、寒々冷々、成経は大隅を出立した模様との脚色である。

俊寛に泣かれ泣かれて漕ぎ別れ、島を立つ時目に涙、（以下白石戯画化）大隅に袖の涙に「お願い、京都に連れて帰って」・「痛い、袖が破れる、骨が折れる」・「ビリビリ、ポッキーン」、文字通り骨休めに佐賀の嘉瀬に向かうが二度ある事は三度ある（佐賀では）との戯画化も可能であり、文芸虚構としてはその方が真実であるが、局に泣かれたこの説話が、虚構とは言え、予定調和のよるめきドラマの域にとどまる点、心残りである。「清道が妻女」人妻である。

歌への関心があり、人丸以下の歌徳譚を種にふくらんだ歌心が創作や改造の教養的原動力となって、硫黄関連記事を充実させたとも想像されよう。

## 八

白居易の著作について、延慶本は、硫黄島の記事の中に康頼在京時のことであろうか「白居易文集七十巻を二部書て」それぞれ寺院に奉納した由を記す（142頁）。それだけである。

白氏文集は大部であるが、長門本は、代表作とも言うべき流行作品、『琵琶行』を硫黄島の条に利用する。即ち島内に熊野三山（本宮・那智・新宮）の社をまつり、祝う条にである。

この条、作者の想像力が加えられた琵琶行の世界を幻想風に新宮の湊に注入している。

……なちの御山に似たりければ、則ち那智山と号す、東をはるかにかへり見れば、いさごへいへいとして銀河渺茫たり、月真如の影をうかぶ、元和十五年の秋、長安倡家の女の船中にしてびは（琵琶）を弾ぜしかば、白楽天月毛の駒をとゞめ詠めけん、潯陽江の辺もかくやと思ひなずらへて、新宮の湊にたとへたり、（長門本巻第四・熊野参詣事 138頁）

これに共通する中国関係の記述が、長門本の中に別に一箇所、次のように見える。

都をばうかれいで、恋しき人には近づかず、途中になりぬる我身かな、長安倡家の女のあき人にかたはられ、潯陽江の頭に捨られて、びはを弾じてなくさみけん心中も是には過じとぞ覚えし、（長門本巻第五・伯耆局事 168頁）

新宮と云い伯耆と云い、ともに琵琶行の内容に及び且つ独自異文ゆえ、かれこれ同一の筆と判断される。伯耆局説話では、長安倡女が伯耆局に、商人が清道に、白居易が少将成経に夫々対応しており、伯耆局説話が琵琶行の鹿児島版であることが解る。ただし、琵琶行の全くのデッドコピーではなく、局の成経に対する片想い風の虚構設定など、世話風の説話内容となっているのであり、ここにも先行作家の作品を受容する、その一端を窺うことができるかと思う。

### 結

以上、和漢にわたる著名作家の業績が平家物語の地の文および独自異文の中に浸透してゆく状況の一端を指摘した。先行作家の受け入れ方法としては、本説を示して引用する方法、飢肥紀行の如き方法が基本的である。この点、長門本の融合方法はやや特殊であって研究者に発見され難いが、小町や白居易に限らず、今後、先行作家の業績が平家物語を媒介にいかに関展して行くのか、この方面の開拓も重要ではないかと思っている。

付記 藤原成経の硫黄島配流関係の地名若干を下記の報告書に述べさせて戴きました。  
 研究報告書「宮崎県における地域社会の研究 — 「みやざき学」の構築をめざして—」  
 2005年3月・宮崎大学教育文化学部「みやざき学」共同研究チーム・代表戸島信一  
 みやざき学ゆえ都合により報告書に遠慮した事柄をここに述べさせていただきます。